

あさひ文学

第20回美術展参加号
令和8年3月7日発行



旭市文化協会 文 芸 部

あさひ文学

第二十回美術展参加号

目次

詰将棋……その魅力……………	文芸部長	相沢 弘幸	1
千潟八萬石ことばと習俗……………	前文芸部長	花香 竹夫	2
俳句……………		椿の会	3
俳句……………		さざなみ俳句会	6
俳句……………		春蕾俳句会	12
俳句……………		山火俳句会	15
短歌……………		真心短歌会	16
短歌……………		しのび坂短歌会	17
西宮神社例大祭ととうがらしごぼう……………	東総郷土史研究会	千本松 稔	19
枯菊……………	海への会	渡邊 昌子	20
雑煮と関ヶ原……………	さざなみ会	岡 邦 俊	21
便利さと五感……………	さざなみ会	岡野 京子	22
旭市文化協会への入会にあたって……………	旭市千潟地区郷土史研修会	井上 洋一	23
編集後記……………			25

表紙の写真

川口沼親水公園

詰将棋・・・その魅力

文芸部長 相沢 弘幸

文芸とは直接な関係はありませんが将棋について述べてみます。

若き藤井名人がテレビ等によく取り上げられ、将棋の認知度は随分と高まっているように思われます。盤を挟んで二人の棋士が座り、おもむろに手に駒を持ち、バシッと盤上に打ち込む姿は多くの人が目にしていることでしょう。これは「指し将棋」と云われるものですが、将棋にはもうひとつ別の世界「詰将棋」というものがあります。「指し将棋」が二人なら、「詰将棋」は一人なのです。より正確には出題者と解答者の二人なのですが、うんうんと唸りながら考えているのは一人なのです。一人だけ、つまり負ける心配がありません。また、いくら考えても相手から、早く指せよと急かされることはありません。持ち時間は無限大です。

この詰将棋、実はとんでもない世界なのです。指し

将棋が百数手で結末を迎えるに比べ、詰将棋は、長いものだど千手を超えるものもあります。王手、王手の連続で千手！盤上の八十一マスしかないところを玉は、ひらりひらりと逃げ回ります。詰将棋は一種のパズルとも云えます。盤上に全駒が配置され最後はたったの三枚で詰め上がりとなる「煙詰め」。詰め上がり文字を表す「趣向詰め」。途中合駒が順序よく現れる「順列合駒詰め」。等々驚くばかりです。しかも答えは一通りしか許されないので。別の方法、手順で詰むものは不完全作と呼ばれ、価値を持たないので。つまり作図する側は、この不完全を解消するために多大な、時に想像を絶する労力を必要とするのです。

近年コンピュータの発展により、詰将棋も解答できるようになり、古来、時の将軍に献上するために作図された詰将棋が何百年も経って不完全作となってしまったものもあります。しかし多くの作品はこのコンピュータの検証にも十分に耐えています。この美しくも魔力の世界に一步足を踏み入れてみませんか。

千瀉八萬石 ことばと習俗

〃 わたまし 〃 について

前文芸部長（学芸員） 花香 竹夫

住宅の改築ばかりで、どこに行っても建替普請を見かけますが、家ができあがると「わたまし」と呼んで、親戚や工事を手伝ってくれた人々を招いてお祝いをします。

もとは、工事中によそに移しておいた家の神を、新居に遷座する儀式の呼び名だったようで、古くからの言葉と思われる。漢字で書くと「移徙^{いし}」または「渡座」となります。座は「いる」「います」又は敬語で「まします」と言いますから、「わたりまします」が略されて「わたまし」になったと考えられます。

古代の一般庶民の住居はお粗末なものだったようで、当時は一家に不幸や災いが重なると、縁起をかついで、住居を別な所に移し替えるというようなことが多かったと言われ

ています。

生活が簡素な時代には、住居の移転も手軽にできたことでしょうが、時代が変わり生活が向上して、家屋敷が大きくなってくると、住居も容易に移せなくなります。

そこで後世では、不幸災害が重なると、神仏だけを一時的に外に移して祈祷をしてもらうとか、老人衆に移徙念仏をあげてもらって「移りました」ということにして、すましたりする場合もあったと言います。



俳句

椿の会

荒木 美枝子

仏前に供えて四葩白涼し
山畑に農夫一服雲の峰
風遊ぶ旗の一文字かき氷
手水舎の音細かりき神の留守
長編を一先ず閉じて年の暮

花園 千名美

正二日無音の闇の真白なる
蓬もちついと手が出る色香り
麦秋や病舎に巢喰ふ鳩の群
石の上にも三年と大仏の春悟りの日
世界一寝釈迦まどろむ春がすみ

浪川 とし子

爽籟やエイサーの音に思ひ馳せ
寒き耐へ筏葛の咲く朝あした
颱風や地をたたくごと過ぐる雨
小春日や止まぬ語らひ友の笑み
大寒や吾の喜寿祝ふ宴の夜

守部 洋子

山門に落葉カラカラ露天商
拾い来し栗残しおく獣道
訪ね来し雨の工房実千両
返り花工房に薪積み上げて
嬰ひしと抱く石仏寒さ来る

高木 健寿

大皿に二匹並ぶや焼き秋刀魚
秋の暮れレコード盤で揺れる針
寒き夜洋酒濃いめにお湯で割り
小春日や登園前の鬼ごっこ
神の留守探しても無き日本製

早川 悟

特攻隊残せし文や彼岸花
忠魂碑手向ける花に赤トンボ
銀杏落葉園児の遊ぶ庭に舞ふ
病食を造るる人や冬ぬくし
病室で冬富士撮れず指痛む

伊藤 あき子

寒き増し溪谷紅葉見頃なり
猛暑から秋を飛び越しこの寒さ
願いい事届けと祈る神の留守
何時いまでも日付変らぬ夜長かな
息はけば魔法使いの気分だね

宮内 幸平

霜柱畑いちめんもちあげて
初雪や庭木を飾るわたぼうし
雪囲い稲わらぼっち八重牡丹
寒ぞらに凜として咲く藪椿
焚き火して水平線に日の出待つ

高品 綾子

新年の白きノートに筆を置く
詠み手母幼き頃の歌留多取り
鬼灯を鳴らし少女に戻りけり
夏の果大道芸の去りし街
木犀の香り貫く築地堀

相沢 弘幸

大空の端まで青く運動会
みちのくの宿に酌み合ふ夜長かな
勢子の引く闘牛の綱秋高し
鬨乱しぶつかり稽古冬怒濤
冬の月禿頭集ふ同級会

和 日和

桜木の葉色侘しき秋の暮
年越のそばにかわりて焼きうどん
初釜の茶筌さばきや無の世界
七草のセリ取る喜声親子づれ
花火よりまづ一献と友の声

俳句

さぎなみ俳句会

鈴木 和江

凍て草の溶けて姿を吹き返す
見下ろして海は平らか野水仙
歌留多とる卒寿の声の高々と
枯芝を踏みつ足裏の静心
潮騒の絶ゆることなく年越ゆる

相沢 弘幸

沈みゆく夕陽追ひかけ赤とんぼ
ひと刷毛の雲を描くや秋夕焼
アブラツソ鬼女と月夜の乱舞かな
冬めくやカンパネルラと星空へ
犬吠の冬の月断崖の洞

伊東 禮子

黄水仙けなげにふつくり蕾つけ
新春や心も体もゆるみがち
夕時雨日々凡々と暮れにけり
菊さかり子に老眼鏡買ってやる
秋愁かな思いつきり紅をひく

石井 敬子

花びら餅ほんのり初めて寿げり
淡雪や円空仏の笑みてをり
母と娘の微笑み交はす福寿草
拘りし装本展ぐ漱石忌
初春や利根の流れの滔々と

石井 孝

生かされて傘寿へ迎ふ初詣
初春や小さき鼓動に夢のせて
鶏頭は夕陽を纏ひなほ染めし
這ふやうに影の伸びゆく秋の暮
師走行く海の恵みや十トン車

大後 秀樹

春は曙海を真朱まそほに九十九里
自転車押し語る人生夕螢
着流しの力士列なり夏袂
山の宿湖あり烟る秋の虹
親戚を薩摩に得たり新酒酌む

岡 邦俊

養老の磁場の逆転鳥帰る
石松のやうな顔せり罔鮎
列強と成らぬ道あり揚雲あげひばり雀
あの朝のフランシーヌや巴里の春
粉蒔くや親父譲りの蝮指

岡野 京子

新年やハガキに孫の初の文字
空堀の古城の跡や半夏生
後ろから児を抱き上げる大花野
葬列の遠のいてゆく時雨また
小夜時雨鬪病日誌読み返し

鎌田 とみ子

そそとして風のなすまま花野あり
小夜時雨バスのライトの滲むなり
弧を描く水平線へ寒茜
スキャンして物を買ふ暮しもう師走
参道の玉砂利の音淑気満つ

川口 靖夫

水菓子は正に梨なり汁甘し
窓開けてめったに見ない雪景色
君ヶ浜凧揚げ親子微笑まし
お陰様家族に感謝これからも
大銀杏幸せ心ありがとう

栗栖 峰子

枯葉踏みリズム奏でる子供等よ
行く秋や壁にさなぎの飛べぬまま
逃げもせず震へる雀今朝の冬
豆炭を熾す母の背丸くなり
寄せ鉢に色を足したり福寿草

佐久間 松枝

大掃除ゆらぐ白雲師走窓
木枯しや木々の枝さえちぎり飛ぶ
初詣曲巖かに響く神社森_も
着替えるズボンに潜む余寒かな
初雪や木立の狭庭美しく替え_は

菅谷 一雄

集う春先祖代々子々孫々
春浅し枢のごとく無言館
ひざ痛の完治を待たず夏来たる
クレヨンの花火画用紙埋め尽くす
さかまきて富士より高き土用波

高野 寿美子

味噌汁の香り立つだし秋気かな
読書の秋辞書とルーペを用意して
世界一の指揮者にこやか天高し
捨てるもの決心つかぬもう師走
太陽へ廊下いつぱい干す蒲団

高野 富子

師走入りマダマダ続く物価高
逢いたくて外に出て見る星月夜
年賀状友の便りは短歌なり
朝食の雑煮ほうばり駅伝見
除夜の鐘耳にしながら宮参り

滝澤 昇

運命を辿る道なり古日記
冥友と酒酌くみかわ交す今朝の春
昔日を偲ぶ邂逅福寿草
春立つや横綱睨む安青錦
三が日過ぎてサーファー挑む波

並木 紋子

抜け出でし命の重き蟬の殻
新米やまづは小さき塩にぎり
行く秋の何処かに何か忘れ物
油虫家の間取りを知り尽くし
冬晴れの空をクレールン旋回す

林 利恵子

弥生尽ましろき地図を進み行く
見晴かす丘のネモフィラ夏に入る
鍬置けば風のにほいや半夏生
一日を二季と感ずる秋の宵
冬晴れを突いて光るや大鳥居

平山 伸

道譲る農道銀座田植時
新緑の九十九折り行く山ガール
絶壁に山柿たわわ河原染め
冬めくや利根の風光筑波山
寒昂苦節の二氏やノーベル賞

深堀 和子

ぬか床にたっぷり入れる秋気かな
前撮りの二十歳^{はたち}白へり菊日和
しぐるるや今朝の小鉢の迷ひ箸
行く秋を深く置きたる池塘かな
今朝のねこ正月の顔して来たり

松本 祥子

突堤に若者が立つ草虱
月見草サーフボードは横抱きに
方位板に稲妻ひかる九十九里
草の花夕日溢るる海難碑
断崖の錆色深かむ秋の風

柳堀 節子

地に宇宙に幾億回めの新緑や
夜空行く裸身の背の傷深し
火の星に花野探せし好奇心
秋麗屋根より猫の僻ひがむ声
一人旅駅舎の屋根を打つ時雨

吉田 哲子

甘口の筍弁当旬の味
九十九折色咲きみだる芝桜
妣の衣も終活できず土用干し
行く秋や八十四年の泣き笑ひ
ふくやかに恵比寿大黒初暦

第60回オンライン句会

・老と老憩ふ縁側福寿草

鈴木 和江

・シアターを妻と借りきるクリスマス

菅谷 一雄

俳句

春蕾俳句会

宮負 克己

神奉仕出かける庭に除夜の鐘
終戦日遠き学友思い出す
残り月涼し蝉も鳴かずして
畔広し黄菖蒲残し田植へてあり
補聴器を着け五月の世と繋ぎけり

石毛 せつ子

衝突もせずに乱舞の群とんぼ
至らざる人生悔いる虫の夜
しんしんと夜の槌打つ戻り梅雨
月光を阻む物なき広田道
空と山つなぎて朝の霧深し

花香 竹夫

笹鳴きや谷深くして水の音
夕紅葉濡れるる如く鳥居観ゆ
風に消ゆ遠き身の上桐一葉
晩年の想ひ俄かに秋深し
人去りて夕合歡の香灰とあり

菅谷 茂穂

港中に大漁旗立て年迎う
まだ元気今年米寿の年迎う
滔々と流れる利根川年迎う
孫もなく静かに明けしお正月
米寿かと母をしきりに思うかな

花香 静子

通せんぼ畑あちこち蔓と蜘蛛
櫓風吹かれてつくる畝一つ
熊いない県の幸せしみじみと
境内のいちよう浮き立つ曇り空
野ざらしの冬瓜拾い夕餉にと

荒木 悦子

遠吠の小さく聞える寒夜かな
柿の葉を一枚残して秋果てる
やさしさに包まれて生きる米寿かな
冬星座独りの窓を埋めるほど
老いしなお希望をくれる初日の出

佐伯 洋子

奥只見空を押し退け山装う
卒業歌指揮は後輩金釦
吾子を抱く腕かいな逞し年男
札納浄火の煙龍の如
白鳥の引きし広田のなを広し

衣鳩 順一

きらきらと路傍の石に夕月夜
草笛を吹く子の父は我が子かな
老鶯の声に送られ句会閉ず
水郷の花嫁姿あやめ園
チューリップ赤が一番子供たち

薄田 美津子

敬老日葉書一面吾の似顔
久々の便り誰ぞに居待月
行く秋や弾き手待ちおり駄ピアノ
一歩ずつ確かなあんよ竹の春
福寿草兎の片言増えていし

前田 春代

梅雨明けて陽差し真直ぐ降り注ぎ
朝取りの胡瓜ガブリと庭先で
木の間より居間に差し込む大西日
炊き上りホツとする香の今年米
皆遠き人となりゆく冬の月

阿部 三郎

初雪は根雪になるか雨夜空
煩惱を有り有りのまま除夜の鐘
初ストーブ猫の指定席に布団置く
御仏のさびしき盆に酒置きて
カナブんに猫パンチそれ右左り

銀原 俊

通学路息白くして踏むペダル
寒朝の耳に落ちたる優しき陽
日捲りの薄さに気付く冬隣
今晚は秋刀魚と決めて足軽し
着替えても着替えてもなお夏盛る

井沼 雅子

ひやつこいが何より馳走酷暑かな
曼珠沙華また曼珠沙華鄙の道
小鳥来る一日の幸と共に来る
尋ねゆく風の何処に金木犀
蒲団着て鳥の会話を盗み聞き

俳句

山火俳句会

石橋 孝子

庇より雨粒一つ水ぬるむ
伸びやかな夏鶯の声が降る
新じゃがの土の匂ひの皮をむく
新小豆煮て利き塩の一つまみ
縁側に一日本読み日向ぼこ

飯田 芙美子

釣船の舳先揃へて年迎ふ
かたまりて藻屑の乾からぶ春の浜
野分け雲海荒れ鷗巡回す
岬へと辿る小径や冬萌ゆる
枯蘆の続く大利根河原かな

短歌

真心短歌会

宮負 克己

我も又幾年稻とつき合て豊作祈り稻とつき合う
しみじみと鶯きて春深く何かせねはならぬと想う
骨折の癒て年明気みなぎり若さもどりて希望の湧く

花香 竹夫

襖ぎへの道一筋に生きつぎて御霊清しく神のぼりたる
師は既にこの世にあらず今は空家の庭もみじ濡れるる如し
扇子舞う有美と若きその妣の美貌がいまも瞳まみに残りぬ

短歌

しのび坂短歌会

藤井 和子

気を付けの姿勢で父の後ろにて玉音放送聞きしは十歳
生みくれし母偲びつつ九十歳の生日今日の夕日見送る
広らなる休耕の畑立ち枯れし雑草白じろと冬陽に乾く

増田 満里子

髪長き乙女が一人バスを待つ青田の風の戦ぎの中に
坂の上の雲の形の面白き残暑の日暮れ心和ます
熱暑日の続く夕暮れ秋なれど戸惑いがちの虫の声聞く

亀田 昭子

やわらかに蕾ほどけて蓮の花恥じらうごとくうす紅に咲く
二つ三つ花咲き残るしその実をとりて偲ばる亡き義母のこと
新幹線窓に流るるみちのくの街路樹の色秋に染まりて

仲村 克子

刻まれし名前の多き忠魂碑むらの嘆きを今に伝えん
フルートの甘き音色が檀林の木立の中を流れゆくなり
人々の心受け止め七世紀小さき仏像如来寺に座す

八木 佐和子

命とはかくなるものか音もなく椿一輪地に還りゆく
田に畑に野焼きの煙たなびきて大地の命動く気配す
フジバカマ・尾花・キキヨウを花器に入れ故里の野辺思い出し居り

加瀬 教子

「もう二度と」「核なき世界へ」原爆忌平和願いて鐘の音響く
秋の夜に色鮮やかな花開く飯岡花火居ながらに見る
紫蘇の実を瓶びんに漬け居し母想う小瓶に五つ我も漬けたり

西宮神社例大祭と

とうがらしごぼう

東総郷土史研究会会長 千本松 稔

西宮神社は成田村が街道沿いの商業街として発展してきた応永二年（一三九五年）撰津国西宮より商業・漁業の守護神として恵比寿さまを勧請したことにはじまると伝わります。

西宮神社ご祭神事代主命（こししろぬしのみこと）通称恵比寿さまのご神徳は、笑顔で大きな鯛をかかえている姿のように、人の生活には常に笑顔と我慢が大切である。仕事も商売でも人に接するときには常に笑顔で忍耐を忘れなければ、仕事もでき世の中も明るくすることができるであろうという教えです。

この教えに従い、先人たちが春の大祭（一月十八日）の寒い季節に、栄養価の高い食べ物をつくり怒って（とがって）はならない、という教えの言葉からとうがらしごぼう



と名付けこれを神前に供え、かつ氏子や崇敬者にお分けすることにしたものです。

この季節に相応しいとうがらしごぼうの材料は日本独特の栄養食品といわれている味噌、血行をよくして体を温めるカプサイシンという成分をもつ唐辛子、整腸のはたらきをもつ牛蒡、ほかに数種の味付け材料を入れて混ぜ合わせます。

枯菊

海への会 渡邊 昌子

厳しい真冬の寒さが、立春を過ぎたころから、ふっと和らぐ日がある。

そんなある日、突然一人の見知らぬ老人がたずねてきた。こざつぱりした服装から近在の人らしかったが、小学校の時の父の教え子だという。

どうみても父の年よりずっと年輩に見えるのだが、私にしてもすでに父の生きた年齢をはるかに越えているのだから不思議はない。男性の手にはお線香の箱と庭先で手折って来たらしい小菊の束が握られていた。彼は仏前に座ると、独りごちるように遠い昔の話を、つい昨日の事みたいに、話はじめた。私は黙って、それでも懐かしく聞いていた。すると、急に改まった口調でこちらを向くと、「ところで先生にはまさこさんという娘さんがいらしたはずですが」という。

一瞬時間が止まったかと思った。

驚く私に「覚えていないでしょうね。高校の学校帰りに、バスを待つあなたの姿をよくみかけました」

そう語る老人の顔に、ほんの一瞬六十年前の少年の面影を見た気がした。

そう言えば、私にも十代の頃があったのだ。暗い顔をして俯くだけの小さな女の子だったにちがいない。遙か昔のことだ。

かつて青年だったこの老人の目に、私はどう映っていたのだろうか。あなたにはどんな青春が待っていたのかと、問い返すこともためらわれた。

あまりに長い歳月は、私達を記憶もおぼろげな白髪頭の老人に変えてしまった。

彼は小菊の束をそっと私にさし出した後、しわぶき（咳）を一つ残して帰って行った。

冬の寒さに耐えて咲いたけなげな菊花から、ほのかなかおりがただよっていた。

雑煮と関ヶ原

さぎなみ会 岡 邦俊

私は餅が大好物で、一年中そばやうどんに入れて食っています。のり餅を酒の肴にもしています。差し歯が取れる事もありますが、餅の魅力に抗あらがえないのです。そして餅のシーズン。出番といえばお正月でしょう。雑煮、のり餅、からみ餅、納豆餅、あんこ餅、きな粉餅と、まさにオールスター総出演。考えただけで涎よだれが出そうです。

餅料理の中でも雑煮を一番食べています。我が家の雑煮は、妻が私の母から引き継いだ「けんちゃん汁風」の物です。大根、人参、ごぼう、里芋などをゴマ油で炒め、かつお出汁、醤油ベースの汁で煮込み、そこに焼いた角餅を入れるのです。

けんちゃん汁の発祥は鎌倉の建長寺で、「けんちょうじる」が訛って「けんちんじる」になったとされています。私の母は旭市の海岸地域の生まれで、先祖は江戸

時代に神奈川の三浦半島から移り住んだ漁民だったと言っていました。我が家のけんちん風雑煮は、神奈川の先祖から長い時を経て伝わったのかもしれませんが、

皆様のお宅の雑煮は如何でしょうか。角餅ですか、丸餅ですか。すまし汁ですか、白味噌ベースですか。雑煮の作り方は、岐阜県の関ヶ原で東西に分かれています。東日本は醤油ベースのすまし汁で角餅、鶏肉が多く、西は白味噌仕立てで丸餅、根菜が主流です。（山形県の庄内地方では、北前船の影響からか丸餅です）

この関ヶ原は古代に不破関ふわのせきがあった所で、東西文化の境目となった様です。不思議な事に東のアズマモグラと西のコウベモグラの勢力争いも、ここが最前線となっています。天下分け目の戦いなのです。

さて今夜は、ご先祖様に思いを馳せながら雑煮を食すとしましようか。

「国ひとつふるさとふたつ雑煮椀」

萩原 都美子

便利さと五感

さぎなみ会 岡野 京子

「申し訳ありません。昨年末で、紙のポイントカードは終了致しました」

二つ折りの名刺サイズの紙のカードに、買い物金額の五百円毎に、一個のスタンプが押され、いっぱいになると買物券として使えるという仕組み。もうすぐ、ゴミ箱へ行く運命とも知らず、数個のハンコが並んでいます。ちよつと傾いたり、濃さも違う手押し感が、いまさらながら愛おしくなります。感慨に浸る私に、店員が笑顔で、ライン登録すると、お得情報が入り、とても便利ですよと告げてくる。こうしてスマホの操作を始めることになり、アプリが追加される。最近、似たような経験をされる方も多いかと思えます。たしかに、技術の進歩によって、快適な時代になっていると思います。スマホに話しかけるだけで、調べ物に即座に答えてもらえる。ポチリとするだけで、買

い物が出来て、翌日には品物が配送される。どんどん楽になり、時間短縮になってきています。現代人として、日々恩恵を受けられる事に感謝しつつ、ふと思うのです。

その便利さと引き換えに、何かを失っているのではないかと。じわじわと大切な感覚が削られているのではないかと。「なんとなくいいな」という身体で感じ取るような、人間だけが持つ感覚が失われていくとしたら恐ろしいことです。あまり手足を使わなければ、大袈裟ですが、脳が萎縮、退化してゆくかもしれません。時々、あえて不慣れなやり方を選んでみるのも如何でしょうか。例えば、手でコーヒーを丁寧な落としてみる。紙の辞書で調べてみる。ハガキや手紙を、手書きでしたためてみる等。その際に、視覚、聴覚、臭覚、味覚、触覚といった五感を意識する事で、センサーの精度が上がるかもしれません。

旭市文化協会への入会にあたって

旭市千潟地区郷土史研修会

会長 井上 洋一

この度は、年度途中にも拘わらず旭市文化協会への入会を認可していただき、ありがとうございます。

私達は「旭市千潟地区及び周辺地域の自然・人文の研修及び課題調査・研究並びにそれらを記録すると共に、会員相互の親睦を図ること」を目的として、会則を定め、平成三十年四月一日に施行し、会が発足しました。そして目的を達成するため、次の五項目の事業を掲げております。

(一) 郷土史研修会例会 毎月第四土曜日

(二) 史跡等現地研修

(三) 県内外視察研修 原則年一回

(四) 自然、人文に関する資料の調査・保存に関する

事項

(五) その他、本会の目的達成のための必要事項

また会員については、「本会の目的に賛同するものを会員とする。本会に入会しようとする者は、書面又は口頭で入会を申し込むものとする」としておりますので、前記の会の目的、事業及び次に列挙いたしました活動内容に関心がございましたら、是非お申し出ください。

ご参考までに、過去二年間の研修テーマを列挙いたしますと、次の通りです。

令和六年度

四月 新年度総会

江戸時代の利根川東遷事業

五月 良文村来迎寺及び樹林寺の歴史

六月 来迎寺・樹林寺・良文村現地見学会

七月 旧足川代官について

八月 歴史に登場する馬について、

東氏と東大社の繋がりについて

九月 金沢称名寺と下総について

十月 金沢称名寺の歴史

十一月 金沢称名寺・金沢文庫現地バス研修会

十二月 称名寺副住職講演会

(於：多古コミュニティ文化ホール)

一月 幽学と子育て

二月 東国夏方合戦資料輪読

三月 東国夏方合戦資料輪読

令和七年度

四月 新年度総会

里見・正木氏下総侵攻

五月 里見氏(清和源氏・新田氏流)について

六月 椿の海と機能及び水運の拠点の考察その一

七月 椿の海と機能及び水運の拠点の考察その二

八月 太原幽学の性学仕法

九月 鎌倉時代の東氏

(東庄町歴史シンポジウム)於東庄町公民館

十月 千葉氏、大友城から本佐倉城に至るまでの

居城の変遷について

十一月 大友城跡、東大社現地研修会

十二月 本佐倉城跡、国立歴史博物館現地バス研修会

一月 「食の里・旭」の十人の生き方から考える

旭の歴史

二月 (予定) 東常縁と東庄

(東庄町歴史シンポジウム)於東庄町公民館

三月 (予定) 1550年代から利根川東遷終了

(1654)を含めた江戸時代前期の水運に

ついて(銚子高田の宮内清右衛門文書より)

以上のようなテーマで、最近の二年間、研修を進め

てまいりました。これまで山田角次郎著の香取郡誌(明

治三十三年発行)をはじめ、近隣の郡史や市町史から、

或いはまた、私蔵の文書からテーマを設け、会員の方々

が独自の推論をも含め、お話を展開され、拝聴する者

の興味を引いてまいりました。

編集後記

旭市文化協会文芸部では、新規会員の加入に努めています。気軽にご参加ください。

現在の文芸部所属団体

- 俳句 ◎山火俳句会(旭) 代表者 飯田芙美子
◎春蕾俳句会(干潟) 代表者 花香 竹夫
◎椿の会(旭) 代表者 荒木美枝子
◎さざなみ会(飯岡) 代表者 滝澤 昇
短歌 ◎真心短歌会(干潟) 代表者 花香 竹夫
◎しのび坂短歌会(海上) 代表者 加瀬 教子
歴史 ◎東総郷土史研究会(旭) 代表者 千本松 稔
◎干潟地区郷土史研修会(干潟) 代表者 井上 洋一

エッセイ

- ◎海への会(飯岡) 代表者 渡邊 昌子
◎さざなみ会(飯岡) 代表者 滝澤 昇

あさひ文学

第二十回美術展 参加号

発行 旭市文化協会 文芸部

発行日 令和八年三月七日

編集 相澤 弘幸

連絡先 旭市高生四九〇―九

相澤 弘幸

電話・Fax 0479-55-6116